

加代は着替えをして遅い夕食の仕度にかかる。冷蔵庫から昨夜の残り物を取り出し皿ごと電子レンジに入れ三十秒ほど温める。小鍋の味噌汁はガスコンロに載せたままだ。そのまま点火すると青い炎が周りから這い上がって瞬く間にホーロー鍋を包む。慌てて火力を絞る。昔、この鍋で浩史の離乳食を作ったものだ。加代の台所は今では柄杓のようなこれひとつでほとんど事が足りている。

幼い頃見た叔父の家の台所を思い出す。広い土間で煮炊きをしていた。鍋釜も大きくて、正枝はそれを軽々と扱って家族八人分の食事を拵えていたようだ。

加代の結婚話で家族中が揉めていたときには正枝が親戚のだれよりも先に結婚の祝いに来てくれた。三月後、父の承諾はうやむやのまま加代たちは憲志の家族と相談し、身内だけを招いて簡素な結婚式を挙げることにした。その折、叔父夫婦は色々とし、親身になって助言をしてくれたものだ。式の当日には、父は世間体を気にしてか不機嫌ながらも母を伴って列席した。

叔父は正枝の親に見込まれて婿養子に入ったのだが、父はそのことを男として不甲斐ないとそしる。しかし工場を始めてからは叔父に保証人を頼んでいる手前、叔父夫婦に大きな顔ができない。それでも父は叔父のことを、百姓ではたかが知れていると負け惜しみを言う。

正枝はといえば、先祖から代々引き継いだ農家という誇りと意地があり、田畑を持たぬ政一こそ信用できないと思っていたのだろう。

「お義兄さんは大きなことばかり言うて、山師や…」  
などと、これみよがしに吹聴して義兄へのうっぶん晴らしをしているようすだった。

加代は夕食の片づけを後まわしにして、正枝に電話しようと受話器をとりあげた。耳に当てると低い電子音が聞えてきたが、電話番号を押すのをためらった。電話口に正枝が出ればいいのだが、もし他の人だったら久しぶりなので丁寧な挨拶をしななければならぬ。それがひどく煩わしい。

いつだったか、留守電を再生すると相手の声が何も入っていないことがあった。あのときも今夜のように電話器の前でじっと立っていたものだ。確か、この部屋に来て間もない頃だった。加代は耳を澄まして伝言を待ったのだが相手は何も言わず、コトツと受話器を置く音がして切れてしまった。

留守の応答は加代自身がテープに吹き込んだものであるから、それを聞いたあと相手はメッセージを入れる。要件をまとめて述べる人もあるが、名乗るだけの人もある。

正枝なら、時間オーバーになるまで喋っているだろうし…。

自分の声を聞いただけで黙って電話を切ったのはだれだったのか…加代はふと、母の心細げな顔が脳裏に浮かんだ。そうだ。お母さんだ…。きつとそうだ…。

結婚の翌年以來、加代は実家との行き来をしていない。夫と娘の間にたって母がひどく悩んでいたのは痛いほど分かっていった。夫に先立たれた加代がアパートに移ったのを聞きつけ、母が思いあまって父の目を盗んでこっそり電話してきたのだらう。長い間、無言電話のことが心の底で燻ぶっていた。なぜか今になって、それが小さな炎をあげ燃えている。これだけのことが、どうしてあの日には想いつかなかったのかと悔やまれた。

考えてみれば、加代がこの前、母に会ってから二十七年の月日が経っている。今では加代自身が、あのときの母と同じ年齢だ。

夫の葬式（おとし）のとき、正枝（まさえ）から聞いた話（はなし）によれば、父（ちち）はずいぶん以前（いぜん）に工場（こうじょう）を手放（てはな）し、店（みせ）も十年（じゅうねん）ほど前（まえ）にやめたらしい。父（ちち）も老（お）いただろう。自分（じぶん）の意（い）に従（したが）わず離（はな）れていった長女（ちやうじよ）のことはすっかり忘れているに違（ちが）いない。若（わか）い頃（ころ）から体（からだ）が丈（じょう）夫（ぶ）でなかつた母（はは）は足腰（あしこし）が弱（よわ）っているのでは…。

加代（かよ）は昔（むかし）を思（おも）い出（だ）してぼんやりしていた。もう何時（なんじ）だろう。電話機（でんわき）の穏（おだ）やかな電子音（でんしおん）はいつのまにか消（き）えて話中（はなしちゆう）の断続音（だんぞくおん）にとって変（か）わり、加代（かよ）を急（せ）かしているようだ。こんなに遅（おそ）い時間（じかん）から正枝（まさえ）に掛（か）けることもあるまい。もう寝（ね）ていたら迷惑（めいわく）だろう。次の休（つぎ）みの日（ひ）にでも掛（か）けよう。加代（かよ）はそつと受話器（じゆわき）を置（お）いた。

結婚（けっこん）の翌（よ）春（はる）、加代（かよ）夫婦（ふうふ）は高松市（たかまつし）の郊外（こうがい）に家（いえ）を新築（しんちく）しそれまでいたアパートから引っ越（こ）した。初（はじ）めて父（ちち）が新居（しんきよ）へ訪（たず）ねてきたのは半年（はんねん）ほど経（た）った九月（くがつ）、残暑（ざんしょ）の厳（きび）しい日（ひ）だった。

わざわざ何事（なにごと）かといぶかる二人（ふたり）を前（まえ）に、父（ちち）は加代（かよ）が家（いえ）を出（で）たあとの仕事（しごと）の成（な）りゆきを上機嫌（じょうきげん）で話（はな）した。東京（とうきよう）の商社（しょうしゃ）に頼（たの）まれて考案（こうあん）した機械（きかい）、觀光地（くわんこうち）の娯楽施設（ごらくしせつ）で使う遊戯機械（ゆうぎきかい）が当（あ）たり、製造（せいぞう）が間（ま）に合（あ）わないほどの売（う）れ行き（ゆ）きだと言う（い）。話（はなし）が一段落（いちだんらく）すると、

「そつちのほうはどうですか。建設関係（けんせつかんけい）の景気（けいき）は……」  
などと父（ちち）にしては珍（めず）らしく相手（あいて）をたてるような社交儀礼（しゃうこうぎれい）のせりふを口（くち）にした。

加代（かよ）が出（だ）した冷（つめ）たい麦茶（むぎぢや）のおかわりを美味（うま）そうに飲（の）み干（ほ）してから父（ちち）は本題（ほんだい）に入る。事業（じぎやう）拡張（かくちやう）に伴（とも）ない銀行（ぎんこう）から受（う）ける融資（ゆうし）の連帯保証人（れんたいほしょうにん）になって欲（ほ）しいということだ。

金額（きんがく）は三千万円（さんぜんまんえん）、今（いま）までの短期分（たんきぶん）をまとめて長期割賦返済（ちやうきかつかへんさい）の契約（けいやく）に切り替（か）える段取（だんど）りらしい。それにしてもこれまでの残債（ざんさい）より上回（うわまわ）っていると加代（かよ）は直感（ちよくかん）した。

父は持ってきた茶封筒から契約書を取り出してテーブルの上に広げた。十年來の保証人たちには揃って断わられたのだろうか、憲志の他にも新規の連帯保証人として、父の口から二人の名が挙がった。外注につかっている下請け業者たち、木工屋と鉄工所の主人だ。

憲志は一部始終を聞いたあと、少し考えさせて欲しいと返事を保留した。

「じゃあ…これ書類、預けとくから…」

父は任せきったという顔つきで一式を置いて席を立った。玄関で靴を履いてから父は振り向いて、ついでだがというふうに関場の責任者にさせている田代守のことをもち出した。二十五歳の田代は工業高校の電気科を卒業していて、技術はしっかりとしているし研究熱心だと大層な褒めようだ。そのうえ彼と妹の弘子を婚約させたと告げた。挙式は弘子が短大を卒業してすぐの来春になるそうだ。自分の右腕となつて田代も経営に携わる日も遠くはない。こうなれば会社はますます安泰と自信をみなぎらせる。

田代は半年前に入社してきた人だ。加代はそのときすでに家にいなかったのだから、彼の顔を知らない。妹の結婚話までがあまりに手回しよく進んでいる。呆れる前に驚いた。加代が横に立っている夫に目をやると、

「それは何よりです。おめでとうございます」

憲志は父に合わせようと調子のいい言葉を並べている。

父が帰ったあと憲志は書類を詳しく見て考え込んでいたが、家のローンを抱えている身で保証人は荷が重過ぎるのではないかと、父の会社の経営状況をうんぬんする前に身を引く構えをみせた。それに今後経営権を握る田代のこと、人物がいま

ひとつ、はつきりしない。田代本人かその縁者で引き受けられないものかとも言う。結婚しない先から負債の責任を持たすのは、父のめんつが許さないだろうと加代には察せられる。

憲志は実家からの頼みをむげに断わるのも妻に対して気がひけたのかやんわりと言った。

「加代が大丈夫と思うのなら、引き受けてもいいけど…」

決断を任された加代は何日か悩んだすえ、断わる決心をした。夫の本心は分かっている。それにこのメインバンク以外にも借金がある会社の実情を思えば気が重くなる。引き受ければ先々長らく夫が父の仕事に関わることになるのも確かだ。

保証人になってくれたものの、あとで気まずい関係になってしまった親類の人の例もある。弘子と田代の会社でもあるのだから慎重にしたほうがいい。自分たちが新しい出発をした今、後戻りをしたくないという思いもある。

加代は書類を返しに実家へ出むいた。父母が老いて困っているのなら、金銭の援助や介護もいとわれない。憲志も同じ気持ちだと伝えようとしたが父は言い訳を聞きたくないとばかりに激怒して加代に言い渡した。

「こんりんざい、お前らには家の敷居は跨がさん」

義父の手腕を信用して協力を申し出てこそ娘婿だ。父の目には、憲志は生意気な誠意のない人間と映ったかもしれない。いや、それにもまして我が娘に裏切られたと加代を憎んだだろう。

指に挟んだ煙草の長い灰が音もなく座卓の上に落ちた。うつむいていた母が青白い顔でちらりと父を見上げ、かすれた声を出す。

「東京の社長さんさえ順調だったら、加代にまでこんなこと、頼まんでもよかったのに…」

途中からそれを遮る父。

「いらんことを言うな。…：帰れ」

重なるように父の震える声に加代の頭上に響いた。そのあとのことは何も覚えていない。高松へ向けてひたすら車を走らせたのだろうか、気が付くと自分の家の前まで戻っていた。

一夜明けると加代の気持ちは少し落ち着きをとり戻す。憲志の代わりに保証を引き受けてくれる人などそう簡単にはいないだろう。父を窮地に追い詰めた自分を蔑み責めるもう一人の自分が頭をもたげてくる。話をふりだしに戻し、やはり夫に頼むしかないと思ひ詰めるのだが、いざ憲志の前に出ると、喉元まで出かかった言葉をぐっと飲み込んでしまう。父がおだいもくのように唱えていたせりふを思い出す。

「俺は小さい頃から苦労してきた。少々のことでは参るもんか…」

父の強がり加代にとってせめてもの救いのように思えた。そのとき、加代は身ごもっていたが父はおろか母に伝えるのも憚られた。

実家の事務は加代の結婚を機にすべて弘子に引き継いでいた。だから弘子は分からないところを訊くため、しょっちゅう電話してきたものだが、保証人を断わったあの日を境にそれもぷつぷつりと途絶えてしまった。

(以上12月5日放送分)